

## 2 作業所学会 地域生活支援分科会 事例・活動報告書

記録者名： 成川 哲平

発表者名： 内田 哲正

(事業所) 社会福祉法人裾野市手をつなぐ育  
成会 みどりハイツ

(事業所) 社会福祉法人伊豆つくし会  
伊豆つくし学園

役 職： 管理者

役 職： 施設長

### 【発表事業所の概要】

事業区分	入所施設
定員	【施設入所支援】30名 【福祉型児童入所】12名
活動内容	【福祉型児童入所】18歳未満の障害のある児童を保護し、集団生活の中で基本的な生活習慣や社会自立の為に支援・育成を個別支援計画に基づいて実施している。 【施設入所】障害者総合支援法による生活介護及び施設入所支援を一体的に運営している。

### 【支援・活動対象者の概要】

性別	【施設入所支援】男性21名 女性9名 【福祉型児童入所】
年齢	施設入所支援 成人 福祉型児童入所 9歳～18歳
障害の種別・特性	主に知的障害

### 【支援・活動事例の概要】

目標・目的	2023年はGHの食費に関する金銭搾取の問題、北海道における不妊処置といった不適切な運営や実態が明らかになり紙面を騒がせた。 地域生活支援部会では、「どうなるグループホーム、現状と課題」と題してグループホームの在り方やこれからのための議論を行った。
計画・手段	GHは3類型ありそれぞれの利用者の推移、障害種別などの紹介を行った。費用面での課題、医療面、職員の資質、余暇支援、あるいは制限のかからない生活とは何かという中で提案を行った。 また地域生活支援部会では実際に日中支援型のGHを二か所見学に行っており、そこでの様子も踏まえて意見交換を行った。
内容・経過	参加者の各地域におけるGHの現状や課題を話し合ううちに、職員負担の問題や費用面の差やどこまで支援を行うのか等、GH支援の在り方の難しさが浮き彫りとなった。

結果・課題	<p>健常者と同様な権利保障を確立し、どこに生まれても、どんな障害があっても、こんなふうに生きたいと思うことが実現できる社会、マイノリティーの意見がマジョリティーの意見に殺されない社会の実現に向けての提案として①安価で良質な支援が受けられる GH の創設のため国費負担の増額、②運営改善の助言を行うシステムの構築、③小規模 GH を推進し、利用者個々の生活の細部まで配慮できる支援体制の構築、④カップル向けホームの創設の検討、⑤在宅重症心身障害児者の GH 利用の提供。等があげられる。これらを皆で考えていくことが必要である。</p>
-------	---

## 【意見交換】

各地域における GH の課題が多く出され、皆で共有した。具体的には・・・

### ① 職員確保の難しさ

年々入居者さん・親御さんの年齢があがり、週末等の実家への帰省が以前のようにはいかず、週末も GH で過ごすことが多くなると週末にもスタッフが欲しくなる。また高齢化に伴い通院の頻度が増えると入居者さんの金銭的な負担が増えるばかりか、総合病院等は同行すると半日はつぶれるため、職員負担も増大する。そのため在宅医療を行っている開業医に訪問診療をお願いするなど工夫をしているが、訪問医は専門医ではないため、専門的な診断は難しく万全の策とは言い難い。このような十分なスタッフの配置が難しいため現状は初回や月一回の通院同行・服薬支援にとどめ、後は本人に任せているところが多い。

### ② GH の在り方について

健康面・体調面の変化で以前よりケアが必要となる入居者さんに対し、今の GH の環境では対応できないという理由で退去を余儀なくされるケースや、精神の方で、調子を崩し幻聴や自傷行為が見られた際に、GH 運営本部の規定で自傷行為がある場合は入居を継続できないと一方的に告げられ、対応を苦慮しているケースがあげられた。GH では約束や制限を職員側から与えがちであり、「約束を破ったからあなたが悪いでしょう」という形が起きやすいが、本来は利用者さんの暮らしやニーズにあった自由なレイアウトを相談しながら決めていくことが望ましい。しかし現状は GH ありきで利用者さんを募るといった形になっていることが多いのも実情である。他方、GH を立ち上げる際に脳性麻痺の利用者さんから入居の希望があり、それを受け予定していた建物の設計を見直し、受け入れ可能な形での再設計を行うといった成功事例も紹介された。

その他、日中活動の場との連携の在り方など幅広く意見交換が行われた。

## 【まとめ】

各地域における GH の課題はひとつの解決法が容易に提示できるものではなく、明確な解決法を得るに至らなかったが、より良い支援や入居者さんへの適切な対応をしていくにはどうしたらいいのか皆で考えていく必要があることが明らかとなった。